

度胸のよい婿捜し・浜田市三隅町東平原

令和3年2月9日掲載

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/min/wakancho_201109.html



語り手 松岡宗太さん（明治29年生まれ）
収録・昭和35年3月13日

あらすじ

昔、あるところに有名な菓子屋がありました。その菓子屋にたった一人、とても美しい娘がいたそうです。そして婿さんをもらわなければと、いろいろ捜しましたが、なかなか気に入った婿さんが見つかりません。しかし、やつと見つけて婿さんをもたらしたそうです。この婿さんというのは、また、菓子でこしらえることがとても上手で、その菓子屋はますます繁盛したそうです。

ところが、よいことばかりは続かないもので、その婿さんが死にました。その婿さん「惜しい婿さんが死んだ」と娘さんも本当に気が違うように悲しみなされるし、両親も心配されたそうです。けれど、死んだものはしかたがないので、代わりの婿をもらわなければ、ということになりました。それでもああいう婿さんをもたらすことはできません。しかし、

人間ちゆうもんは何か一つ芸がなければおもしろうなあが、いよいよ他にやらんちゆうことになりやあ、度胸のええ、寂しさあせん婿さんを捜そう」ということになりました。

それから婿さんを一人もらいました。ところが、夜、婿さんと娘さんと連れて寝ていて、「まあ、ちよこり起きい」と娘さんが婿さんに言う。見ると、前の婿さんを棺桶に入れて、埋めずに床の間に据えてあるんだげな。そして棺桶の蓋を取って、「こりやあ、初め死んだ婿さんで、惜しゆうてならんけえ、埋（い）けんこうにこにあるが、この肉をなあ、切つて食べつりやあ、わしの婿にしてやろう」と娘さんが言いました。新しい婿さんは、たまげてしまつて、とてもそれを食べる気になれないので、とんで帰つてしまつたげな。また、婿さんをもたらしたげな。次の婿さんにもそのようにしますと、これもたまげて帰つてしまつたげな。それで、三人目の婿さんに

も、そのようにしましたげな。しかし、その男は度胸がよいのだそうです。「これを食べたところで、毒で死にやあせんけえ、どのくらい食やあええか」「いや、そりやあわずかてえ。好きなほど食やあ婿にしてやる」

「よし食おう。包丁もつて来い」。そう言つて包丁を受け取ると、それを切つて食べましたげな。ところが、食べてみれば、それは菓子だったげな。なんと言つてもそこは菓子屋なので、前の婿さんに似せて菓子でこしらえてありましたげな。その男は、そのように度胸がよかつたので、とうとうこの婿さんになりましたげな。

解説

関敬吾博士の分類では、「本格昔話」の中の「婚姻・難題習」の中の「ぼっこ食い」として登録されている。各地に類話が認められるが、県内での分布は少ないようだ。

（元島根大学法文学部教授）